武馬見笑集

坤

和装本
ケ5
44
85

大坪武馬見笑集目録　坤

一　お客乃目付に違ふるを知る事
一　百馬乃器の事　附　五性十毛の事
一　駒四調老馬と不足別の事
一　何れ鞍の徳を知る事
一　轡の品を知る事
一　鐙の品を知る事
一　手綱の品を知る事
一　押拭の仕過に乗る事
一　切付の事　附　障泥の事
一　手助の事

一　馬の髪をかりて難を庇に組すといふ法を知る事
一　髪かり様の事
一　爪切様の品を知る事
一　爪を飾る様の事
一　湯洗油入の事
一　夏冬に随て馬乗様の事
一　夏土用の内に乗様の変
一　寒の内に乗様の変
一　早馬の底足を流て乗ことを制する事
一　馬を洗に秘事ある事
一　衛養に心得ある事

一　馬によりて肉持せ様の事
一　薦架の事
一　馬の轡の事
一　馬に洗薬洗ひの薬を用る事
一　息合薬の事
一　肉脱の薬の事附暑気に中りて痩衰の事
一　馬の目星をとるの事
一　四足に悪血ある馬の事
一　十二経絡七情の源の事
一　針灸の事
一　馬醫を撰道理の事

一　一ッ業之事

一　先生是乗りけり

一　肩抜馬出張の事

一　節用の業を嗜ム理の支

一　乞ける乗人の事

一　馬の上手になるに鑑を知る事

一　養ひける乗人一落の事

一　八條流梵文呪傳之事

一　小手を能ク知理を知る事

一　大坪流を分によりて教へ違ひる事

一　小野より出けるを乗し事

一　荒木といふ人出るを乗まへし事

一　石井といふ乗人込るを乗しけり

一　吉田と云者と洗馬銭乗し事

一　馬を乗ひ労て毎附の事か

一　常に書を受け取る之支

一　上手の風を書しる事

一　乗方者馬貢役曲騎者事

一　流鏑乗と云異隠を知る事

一　同鞍鐙の事

一　兵法者鐙の術に馬上の事ある是と云理を知事

一　馬を始の術ある理を知る事

一 馬史に依る事
一 遠流馬を引し時の事
一 てゑえ引し悪發する故事
一 將勞駿馬ハ疲労殺する事
一 騎勞の馬を使ひしを知る事
一 文盲は素人の事
一 又馬に放屁き依理の事
一 馬に感應の理有る事

大坪武馬見笑集 坤

東武 斎藤定易彙編

去頃目利者の云へるまゝ古書の渕をも云頃
抑は三國の馬は風俗を知りて本とし大形
朝鮮の馬の名まはかりにて天竺の馬は聲
まさの事によるとて紅毛の渕とて淡和州の馬
の目利を知るといふよりして三國書は内より馬の
相はちと氏見へいつも異形の渡りたるを論せし
一つの秘書と見ます式人竜馬の目利を伝授し
て記しまして是を秘奥と云ふ然とも世間に謂馬

もちゐし又高麗唐土此馬をも尊みて殊に賞し
ける程の馬なりと聞へて有り唯人気高き故の
乗を主とする所を称して有りとも用ひ古今此流にも
近きを弃て遠き強き謀ある者を先として切際し遠き
弃て近き強謀の者は除して後気をもいたり

一 武書を見るに 百馬此馬と名付馬の毛をいろいろ段
やうに 百総して一つ此是と定め深く尤此名の所
らんと思はれていと去りも流に能くもま此五性
十毛と云本毛を志るよし 青毛 葦毛 木性 栗毛
雲雀毛 火性 鹿毛 糟毛 土性 鴾毛 河原毛 金性 黒毛 佐
目 水性 これを云之 百馬とかくも名書といふとも

鹿毛十毛の内にては黒き事之 甲乙の陣出陣入部
軍事此毛甚所土性十毛は用事多し

一 当世の人毎に駒と唱へし 或は老馬を用事也
当歳より云来りて之駒と名付二歳より十五歳迄
四歳といふより 十二歳より以下を老馬と云てむかしは
今と違ふ所にて吟味要しき也 今は駒をといふ人さへ
まれにして 用老馬は是によらず見るその
さりし也

一 鞍置所を可と云は 此の鞍と云は肥たる馬も痩
たる馬もよく 道合背に乗く 能合に成
その之 曲たる馬も又 撫手前ありよくきて

よし家人をも文武を磨くとも深く業を勤て
こともなし成敗り作の轡を好む人も今も
用る事之志りまでとも東山殿光源院殿より
前代の作者は用る事となりきたるたし其の人を
作此轡鉄はことをるかり紀之浅様を求め
作らせしむるとも也捨たるよし

一 轡古鉄古とも大中小丸角此轡在めつを嵩
流まで用る之其外の轡は用る事なしともまる
新轡を好むはたゝみのわかりに金を入るならは

一 鐙は平のあまたもよし金にてもそみもするよし
さまでしかも高流に用る説は持へ相と仕候也

一 手綱は細きもよし短きもよし文寸法は七尺五寸
に定むする事之されとも七寸は尺の外と云も
軍手綱とは伝授極秘事なり

一 面懸の法は撫式に減尾連乃延緒腹帯此なり
丸革此寸法家度毎に仕を法し定め事なり
まして小紐はゆるりと甚見なるよし

一 切付は志ゐひてけるまさつれを用藤流も志ゐひて
居ひさしら程氏可とも

一 手助を讃まで当世はすれ多く書此なり
しらひなくして悪き事之唯依手助を肯とす

一 馬の鞍をかくる事上代までなき事之いつの世よりか

始りん毛差髪始りしに付ち紙を之まて
鞦並尾に懸るとも更に世に有やまてもらん無し六
言る乗尾也其馬の尾にも尾に懸るまじく正平
有将年来は馬毎の尾筋を立る故様に敷無り
尾懸ありまて付しきこれもむかし也とく
尾に懸りて尻をなれと世に一様の風俗に異なれ
ませ候しるゝ

一 白髪毛なれ曲らぬは跡中のなかりに切るよし
髪並に生曲るは烏帽子形を可とし元髪を
次山なるこそ能始し

一 馬は尻を長に不寄る尻をは九尻無之小尻

なくは三方一文字に角並候て其毛長ゝるよし
其外早馬の尻の毛様なとは駿馬は尻石に似る
尻血蔭馬の尻反り尻坪尻寂き尻猫尻腕尻弱
き尻うちやうまふこれ皆尻にてら尻裏痛
尻虫喰尻なとは菜[有]患して性弱き尻菜は菜
を付め莫ゝるゝ可有

一 洗尻と云は紫ゝなとしけるゝ可なり流猫ゝて宗
なる時を掛尻は雨をは上よりかけて宗尻し
是を名付て心の皆と古人は尻り

一 腿毎に馬は足をはよろ加減は湯にて洗ふ
よし文書より秋ならし夫まては番方になり川入

より秋の末迄春は始めにかけては胴の肉をは
ぬくさせぬもの也

一 夏は季に随ては厩を涼しく致して葉数ふ
事可之然は厩を暖かにして込へからす胴の肉なれ

一 冬は此時は寒き毎度胴を胡涼しき時は此病出来て悪
煩ふ也

一 寒の内より二度祈暖なる日を此病は煩

一 むかし或人は云るは馬を煩度毎に池を渡りて
なを速かにして此を煩ぬれは目足をかゐ村血
出来るして後にふ流の速足と成りて是を詫る
と語るものなりて此みへ翔ると煩ふ一番の

うちに一度煩ぬれは前此なしへを煩ふとものの
なりもしにかりし煩ふては馬の気乱息をして
二歳馬となり十七歳まて煩ふ人も少なく煩ふ事を之
とかくまれり

一 或人の云馬飼此すに秘事有りいは成程馬とも
やまひを胴其また此をかりて世の人に上手といは
草をも水をも胴をは以之と夜水の飲掛ける
かる事之さうも有りなくしおもしれ

一 胴をまもりは大豆なとをは水にてよく洗ふて気
まもりて胴へし勿論荒糠なとを胴といふ為流
小かりて制する事之医にいまく細成ものは肉と

なりて荒き肉は毒と成ともいふ者あり

一 早馬は肉は七八分を可とす然して老馬の肉は十分
なるは却て義相なるべし老ても七八分をよしとすべし
然れども弱馬又は息浅く堅き馬をは十分迄て肥胖に

一 武人の乗る者は馬を洗ふ事といふなし如く蒲柴に
なるは乾を遠ざくもいはぬ馬とも半年病ると
なくなるといへり

一 馬は口の中よりにいふ瘡毎をは腹をなれ其瘡まで
毒になるの義肉を剥て撫捨ざて内腐流れ口の患に
も此事記せり

一 去水の根にてきりもまんは敵をなるとにて用薬用ると

なかれ馬を離の封にいふより外大陽にして
肉は陰遁するみより湯浮湯寒茶用る内に
なるの失知ある

一 馬に用る息合とて割に茶法ありといへる人に
用る気付にましるなし

一 寒気にむかひて馬は差液し附子以内羽を
まぜして附子若葱は白根に湯煮して焼酎
少と麝合能き酒をわかしてさまし用べしまた

暑気は馬の腐落しみは胡毎に胡せう 益
粒ご粥に入て水まぜて用ゆへし 酢にわり
口を洗せ息合薬を用ふるもよし

一 猿頬なるものは小馬目を旅ゞるをいふは筆此
慈をもちかへしてやけを目の内へ吹かけ迚為る
為之迚りして摩目実目上実目ニすゑ迚てよし
一 四足に悪血有馬をは四ツ目にさしひく灸すへし
ましては四辻此血をはなれしてよし
一 十二経絡七情は深く人とかはる事となし然迚とも
馬よりも膽あり気に惧あり世話にいふへと馬に
かきられはなりとは此を陰の動働ともに皆膽の清
流するなりへ之驚きに膽は夭おれ此流れの止まる絶せり
一 針も金針銀針鉄針文も大小長短の計略へし
灸も羌灸苛調灸鉄灸を用迚し是皆病に寄也

用る事之春夏秋冬四季にそはして灸をも
へしと然銘は針を割して灸をもえらふへし
或馬醫乃云
一 病功に何ともさる馬醫の業用る事なし
血脈をよくしるとも是を迚ひまさに知迚
かたきものと業浅き云し唯見脈しるを大事此
その為迚ひ馬は思ひの量なきもの也雙換も表の
脉なり何ぞしる其外諸事に虫腹のとそその
流らふところをしるれれる者之能く心
残付て先習ふへし
かくとも生死も知り迚るへし

かけたの事ニ而地獄ニ而捨てる
せん座志ら木草くさり出きてそれを
とのやまひみて生きて治るし
一或人馬の一ツ茶を知りて引出し是を秘方
せり識の茶の病に対して事有時は血液之
き戸は年久敷波茶を椀にして留まり
牡蠣殻なり其価は蛎のからを七ヶ七
度焼まて其度毎に葱の汁を付て焼七日ニ
而り十四度焼なり是を後能く粉にして馬口
を洗ひ右の茶を麻布ニ付て上茶の馬には酒ニて用
下茶の馬には水にて用下馬の図のさかり

たるを上茶としてありたるを下茶とに知るべし
一年の生茶は青茶に而ころの黒焼を煉合せて
年の生きたるところを酒にて湯にてたて糠の計
を揃て付べし
一道あるとあしき所を参て行時馬をくりて肩を
抜たる時は其流より方の所をおろせるく
滝水にて洗ひ追て歩ませへし腫って血をぬき
一馬の在所推のらん人は庭に首用の茶を常に
懐中をへきこと或は庭の波多とた病ある所に
を立寄を能く見て奈そり浅ぬるくべしてとおり
たらんときはいましかるへしとれ

一武家人の心得るは老とは云ふすそに入まへと見え
ける由之術なるの事にいふまでもなし
ゆゑかくのごとく頭を低くなせり足怯くして自ら
こゝろ悪しからず故に進むるを乞ひとさはなしやうと見え
けれとも許りけり
一武人の心得るは云ふ武家盛は四十より六十迄
の内なるべし三十までは人毎に血気日に
かはさるゆゑ私の思ひに引かれて大概無理成
事も多し四十に至り思ひ逢ひては君の道と血気
志つまる故にて千万本の分別出して萬能
の誠に志ていふびに家なる道和合して危末の
たゆひなしまし六十は行までは分を体位
に立起と心得とも誹ふ頃歩して叶はと心得る
一ある家人の年老したるまでなる武教を好て修理
無理を云て家をば馮婦を虎を搏にもよし
今はむかしとかはり愚をされ行歩も分ず
まかせてあると云て止なんとぞいふまでもなき
ことなりまして天下になふひなき基はいゝ
ならしもあるをば家さるものを賢人として
り切成名をとて功退は天の道之共云り
一ある乃下手なる武記進るはいまい三人なる
者の奥儀にいたりてきまれ此之たまも皆初学

此時ハ下手ぞかし志かりて秘術の法をもり
たるは上手となり諫するハ下手となる下手
何迄も上手かりなる身の上へ見うそしれの
あらんや兼の歌に

下手あるは上手の為のかゞみなり
兎にかくいりこたし人ハ持し難し

一、武人のいふ事ハ古八條新八條ともに梵文
呪傳を秘く加持主ハいふやうの悪あるも自
在に志てはしらざるの事へ之ことえてもゑて
と梵文呪傳を加持してそれともさらに其利
生なく皆妄語にして流儀をかさらにする

ことく思はれて其の他にも法り出來ると語わり
師ハ古八條家のおしへに混ありハ何ぞ稀ぞ
世の中に人馬の生涯りたる事へなりよく
秘術成就して奇徳の位に叶ふ由人条度
此加持をもろにまたいふやうなるもあらず
也にても私の思ひを修て梵文呪傳
を唱たるによりてかゝる志かゝんやいに
への宗師皆公卿殿上人にして今世活渇此
者此風なは何ぞれ古八條ハ八條家の余流を
以宗師として新八條は近流なるを秘とれ公
正直にして秘術実なりふ事を性の法てなる

是武悪の思量なく未だ是神秘なるよ
より梵文呪傳其続通妙奇特をあらせり
其上蟻通の明神も紀の貫之が歌に冥慮
を和らげ給ひしも実に感應にあらずや

一 或時大坪流を伝へたる得したりといふ者
人あり来て至極をたたし給ひは武悪不思議
の要文ありしは思ひ邪か従をもて大本とせ
られ候へ苦しかれは大坪の一術なりとて何か
ち書記しかして見せければ先の大坪
の奥儀を遁て流外の流をの書集なり
武悪の馬をおこせし事を乞ふして武馬の術一々口

してあらし唯彼人の伝授得労の法に落とく
後学の懐を閉じ永く良祖の名を汚したる
やと思ひしれていと悲し

一 或大守良宗人の乱かくせられ玉んためにに上将
なるに鞠にをおしての口を放といふなを鞠出来候
法術に仕込みさせられ数多の宗人を勢して
彼馬をそえ出す手をとる事をよろこびし自身を
して毎日或内法定を呼せられ遣て係のる武宗
出来り門出したりるいふたち難不おちはら
是非なくく鼻息よりくちなく是家
下なる是人口を放ちさせるをなく通をかけ術て

たゞれをまさんと云ふ然れハ元その恩をうくれハとなる
る故に此歌さんと志有り然により法定をさや
云ふ過のなると公ほて以ゝ今志しといひて隅の口
上云ふ作に出留前にて口訣させられハ案に
たゞ人をもしるにて知りされとも先人の変化を知り
たる故甚深の屏風にありしと志うけ陰は調
子にてなる歌志の免許たる故相違なく云ふを可
しけり其故に彼君法定にしてかゝる武を測せ
ならせさる事
むかし荒木といふ人免許しける歌云ふに通ける
を世にあらはさす武時いとむつかしき出典

なる歌親て云ふに有れ一足もいはさんとよとく
云ふ通しけるなりひとたび云ふてなりても此を後へも
退きしてうごき働く事もなく志て立て了不そて
口を莫けり然るより外た然ひてこまりし世るハ
もそきと曲なる張りたりとてもなされ有りしを後なき
此る二度あれとなりりきとも識に出人の云ふ
總といふかゝりて公源き事之古八条度の哥の
書に此云ふ中の公ゝ思ひしと歌を免り
とし存歌難の人あておくりたし
公歌玉の口おもひつて此せ
と有し云の発云ふ歌これハ枝たるとて只そなれ

一むかし房州より石井といふ京人ありき極めて
て乗る武事を好みたり或時は荒く乗事
の流よき馬にのりにのれはさして誰るは勝て
むかしも乗座にて退ゆ足の至やき立に行
鞆足よりもる或ちやしなかく小庭などにて
いの乗かし野原にて京人とて野原に
流乗して好く貴にのれは皆乗しくる込てより
其時京都に傍りせひは込に込せて三里の野
を走らせければ其後は二度と馬の曲をいたさ
ばりけりとぞ
子孫のさとくといふ乗馬の

日々よみ鞍をおろし乗るなれ
と古ハ條度の説の書にをえたりひとつの
鞍さよりも其の勢を石井が乗し右のことおや
いふらん

一いにしへ吉田といふ京人ありて洗るを京との
上手之き洪人乗を腰強くして後悔を業事の
構を好てたり遊ぶして陸奥の者は京などよりも
馬の名をとかるをもなく相応の理ありるを我
をさゝされども其後によく京者の出来るは
主人生付に勝たる名法ある其人文字と
いふは通たる我乗の及ざるを自然と術自然

の位に叶内ハ随逆此るゝを明なる也其元
此陣不陣あるもしなると知る所也
一 式乗人の上手ハ乗るを乗ゐけて乗人ハ其附作の
人には世多く違ふ事有てかはる又何るによ
らて行口にて門まで乗を馬専一の毒と成と
悟れ
一 歯にかけるゝるの和けば様なくてして下手ハ其
歯を折かきく乗なり一旦ハ乗れ候へにて
とも後していゝるの労となる乗ましきくきと
其歯の間ちらく生付たるゝるは必喰止れとの
なり西総を呼なりと仕付ましくして大きなる

先つ乗の書よりは海して手の内鞍合せ
大事なり
一 乗人といふされ人者は人のお作く乗ましく
美むはけしきるをよくともなはさうにむなし
しき者なり善馬は其人その乗事なり或ハ
世俗にハいふなる此乗人ハ早馬を乗事上手之
彼乗人ハ曲るを乗事此上手なりし也と
いふハ皆猿作のいふされ故之誠此上手にあり
如きハ善悪曲馬たるなく一ゝ此手綱にあるべ
事なり
一 世俗に乗方者馬責ハ役曲乗者と云しよしをはり

一 先ゞ方者と云るハ騎射礼式軍術等の
ある一術の事能たしかに其徳ありて名利の念な
く唯其術のあきらかなる輩人を前より名誉
付て其方者とも云る知りとも一定の其人とも
いふをえさるにようて右の徳を具し人を云の上
におゐて師道とする事古今此道之外に馬
貴没といふ場貴一通を覚て其外にも
多くいふて馬に汗をかきるを名とし式ハ約
態の勢る此貴賞又ハ鞍鐙具の品を志る
人ありといふとも曲節者といふハ并其品に
達したりて是をなとのりみたしにもいふまて

是次よりも如法にをきまして其術の物佶にも及
はすして唯其極とする所ハ馬の上にたゞ鞍具ハ有紀
をなりて鞍立轡泥水付曲けの連鐙立障
子并庭中馬廻格子并格子此曲千波扉
風波平地の乗足鼻子象を乗能く此事能
其人の目をおとろかしむるに及て武用に成
さゞる事なる為人をさして曲節者とも鞍達者
ともいふべき能き所に右の様に優劣の有
事をしるべし

一 式法礼式伝りしハ我上にてこれ此張礼式
上よりおとしたる弥能からずりて元事の手限

乃紀合戦なとはなりしより定て[まれ]なる事にても
はかりなきをもちもちゐる者ありて長陣にはおり
たちて諸たたかひあらん戦もさゝりて足らんより
中てと戦ふへきをにや
一 鉄炮ちかきまて灌録をもて落るせぬやうにたよ
くかいむる教なりこれも分事の至極なきを
連におりたき時は文無を敵と組打するとせんおり
如く武者も結付たらんは何かわかる人にこそ近流
此鉄炮は有りぬやと思ふは中に結鉄をなきし家
ぬまいは腰鉄具足は分葛此佛に至まし
一 武兵法者鍛錬のは一戦に足ははある兵鍛足は
る上は太刀打なきと云ふくを好なるなりなるは上代
より武術たしかに相続し来れるによりて馬上兵
太刀打鉾鑓の扱も太刀合弓此衬柾継ぎする
まて家術に委細に是なり何をもて此等の
術をあるる事は何らんや稽は道によりて賢をまても
さるか唯広敏術は事なきたると人のおもはん
なまし
一 武軍書をよまいは軍なる此事哉なるへし書せし
ことを上まいは悪るるを悪をそ得きのせたら識に
軍の大意をまたさせ人の作ならんと思ひは
楠良将は日の本の軍祖たりしとも其術の功なる

人にまさる世ほかへしえてさらにことなる者あらは
なかりし之唯今此世の不思議なる軍者
の世後再誕にさて候之く〳〵しき理り人を
昔清和天皇より貞純親王へ源氏ひとさまし
おりも亡輪に弓法る術是ぞ二つにわけてくこ
されしとうやきらまで故に至るは彼の術にして御術
にかへりける其はいつさまとと之
一世に三人のまる事あり是人のまる事のいるは我千
里を遥むる事諸事分けさ〳〵と雑録をそへ
よまゝとなれは人にあまさうとのふ文書人の書更
のうちるはる千里のまるはるけ送とも一日に

栗一石を喰ふとなれはさへのようへ事にさてをき
ぬ急存の粥菜如なしけまいかまてはのそましかる
まとつふ今書人のまる事のいるは二人ともにたる
と我称かへり今時は千里此馬を有ましたと
なるありとてもかまてととの様者此様事なり
かうる一其上千里此なるはなるとのそ日にて
たとえきとなれはさまて一ヶ所一日に十二里やすき
里あゆむ歩足にては中〳〵なるは追々にし
我らは千里のまる様てなにの益なしたゝ歩合
たるを大切なしきと語まり誠に理に達して
道成かむかし　漢の文帝此時一日に千里

然れ共是を献する者有りと云。郷諸侯皆是を令く
是を受ずして文帝詔して曰く、吉者に行日ハ
三十里也に行日ハ五千里、鸞旗在前、属車
在後、吾独乗千里馬将安之乎とて乃償
其道費而遂被返之。又後漢の光武帝時
千里馬と宝剣とを献ずる者有り。光武帝
是を珍とせずして馬をハ鼓車に駕さし
剣をハ騎士に賜ふとも古文にも所載れりや

一 遠路数百里を経て来るを労ハずして座に
る宿に入よく嘗巻をもとすべきの之式ハ店
ゑとて[illegible]宿にてハ皆を[illegible]もたる之前之

一 宿に着てハ湯洗をさせ肩腰をよくさすらし
むべし。然れ共湯より先に道をつるなれバ胴縄を
かけて外あることなからしむ

一 大名先は悪病ある時ハ口よくハ家の悪敷事
有と古人もいへり。更に洗ひ[illegible]せ[illegible]
なきより[illegible]重致[illegible]人に[illegible]里
何れ之式[illegible]奥へ[illegible]との間三寸[illegible]
なとよく[illegible]是自然の理にして
[illegible]を[illegible]口痛の文ハ[illegible]必[illegible]
[illegible]式は絶[illegible]せ[illegible]る[illegible]
[illegible]れて[illegible]悪敷事[illegible]よく

其ゟ射て之を知らぬものは大概なるものなり

一 玉博労洗るを愚なる事なり 傳へ聞たりと
古にありし式時 玉人は是を以て能く洗る故
博労等は彼らのためにて之なれば俾なる
其陰嚢に細紐を射て腹帯に結付けたり
さまざまにも彼らを仕掛るも周を知らずして
けまじきは人も鉄にてままに其をしらずしまして
るは陰嚢をあんきうく其の場にて死ぬる事も
これを合せるものはふびんに思はれて洗まり
を潤してさりぬ

一 武将等の馬悩なる仕方あるに目も向て

らまじぬ事なれば無理に射によりて末世なるを
愛する人のために邪法を向けて人になるものを
射てこれ一生をくるしめるは我ままなる人の
道之

其一 下口にはよきことまでは首根にはよきこるには
玉状を射て仕返事

其二 口波強きるには仕掛物とてふくの物を以て
痛を射て仕返す

其三 舌をおそるるは火箸をもって舌に
押出す事

第四　焼るをも右に記して陰嚢に細糸を付て使事

第五　荒強はるをハ千人门と名付縄を付大勢寄集て法よく足を门て使事

第六　虫を噛きえるるをハ歯をうちかきてまて事

第七　茄むけらしきいるをハ縄を我身も付て追出し四方分て放るとても法くたてきたてるを法よくき見て使返

第八　込るをハ為に縄を付直て込附彼縄を尻より门を見咽をいためて使事

熱して下肝の事は鐵下焼きれるとに為を高く云事

第九　口をふるるまさハ虫をいたてるるとをハ舌を琴の糸にて法よく結て使事

第十　虫を見は少し悪気るまゝ人喰るをハ牙を焼て口の肉へさしつゝ咽をかき破いしてるに脇を付て人を欺事

第十一　骨の落入たれるをは腹帯結不を二所たをり為縫針に縫付て皮肉の間ひきぬいきりておきて人を閉る事

第十二 肛門の白きゐるをは鍼針を指て墨ぬるへしをさし入て人欺事

第十三 尾をさしぬるには尾筒のさきへ鍼針するををし込て人を聞事

第十四 老るをは歯をこしらへて歳を若きにみせて人を欺事

右は長たる部をわけて書たるなり其外いろいろのことをなしてゐるを痛悩させし事数事有之或附会めたらしきもれていつしきゐる銭をちけ様なる覚て

座るとてわまりに随よく併の仕置をゐるしれるゆへこゝるの咽破れ日の内に死にゐることなれか彼情労口中を悩日行時もよき思ひなく年月をゐれりひいて定家此時とかく至る場所にして或るをゐらく痛るしれるか行のきり口にゆこりて腹突き破り腸をくされと高所に死も座にそれまで十日あまり苦痛して終に死にてれり是銭ゆへ人毎にゐるの思ひなかしも報なりといふなり

一 世俗に此の音を陰嚢をいふ不地此ゐるを一句の馬といふ之当年文言此宗人

武家にて時労とも多く心を悩て入るは
彼栗毛鹿毛の者は別にちなミとも陸嚢
の者たるべきものあしきといふべき其場の者ともさ
まハ甚に強なりといふべき肝腰いふし
一 武人の乙人ホ馬ハ十五歳迄なるハ又なるに
てなるしき事なり其ハ馬を一代までてなし
なる事ハ乾を強の理なりてますにに道に
背とせり
一 馬ハ上ハ高の空に上りまして感應ありて能
主を見分ける所なり武士たる人ハ常に飼
馬の為我を衆ども執を主旨とせてかすへし

後漢の劉備戦負て敵におハれて既に流危をのがれし
時乾彼の名馬ホ告てハるく今日危き事急之
助けるべしと云て引一躍に乃労るるまま
濠に渡る一躍の檀渓を飛越其翔ちより
又天正の頃四國の輪泰の元親豊後に攻向ひて
島津と戦ひ彼人馬敗乱ぬ既に死に及べし時
内記黒と云名馬主を知く何國ともなく翔り
来り元親の命救すくいし事あり古今馬の
奇特勝て計るべからず乾も神妙の所なれぞ
実の心を本とし慈敬厚いはゞ校の馬もなかなか
志りいたさんや

論云肥たる人と痩たる人の徳不浴にして肥たるを
徳とし痩たるを浴あり能々一貫の位有
叶へ共肥痩の形によりて手能事之力ある人と力
有る人も稽古の内は勝者ありと云ふよりし手術を
論し学問は徳によりて手事にちなて出来
るもの之明かに心すり如此は不二一貫にして
るの人に和合の頭に有力無力にしらぬと述
智ある人と智なき人と稽古の内は甲乙有り
善師にとりて切磋琢磨すれは筆紙に
句におちたる妙術にいたるものに有智無智
不二なしとは其道一貫之式人の云一生の業

勤にありと云々
論曰立史を師として脈診を手綱として稽古は
本を尊ふて自然の幽明に眼着志は不
遠を旨とせん
右上下の巻は馬の性にして流ゝ十二章の稽
古を以て自然の評を顧ても唯愚意にまかせ
志の稽古を述るもの之功者君子の人は勝を捨て頂を
柏子にて知るへし座の浅きより深に至る習の理をしる時は
時計を以て四季の運行をしり磁石を以て方角
をしるとなれは此書も又迷ふの者によりて馬の
書すともなからんものの稽古右の條目によりて

當流の術書せらるゝもの天地懸に處いたゝし
勿論至極とする所ハ一貫の手綱なれハ應導の法
ハ濱の纏術のことく常術に曲直邪正の随宜相
術に騎鷲の法醫術に針灸薬禮術に大追並懸
流諸馬庭家具名諸ハ濃軍術に馬譔馬教清
道遠家川家物見敵合組方諸具の扱諸具
の仕立候りこれをさして大坪の一術と云ハ中
古書の事を右の俚語の类に記まうたのすれ
ともかくあるを之取り胎思ひ移り候事のをも
鄙なり厥後ハ後の君子此書に誤所あらは
改正たまへ璞玉まかりに良工の手に入て光あらん

靜かとしなかんの志